

フェビアン主義者にとってのジェヴォンズ

阿部秀二郎

はじめに

限界革命の同時発見者である、ワルラス、メンガー、ジェヴォンズのなかで、社会主義¹⁾との関係を明確にたどることができるのは、ワルラスであろう。父オーギュストの影響を受け、さらに空想的社会主義者のサン・シモン派とワルラスは関係を持っていた (Jolink (1996) p.60)。

フランスの社会主義は、マルクス、エンゲルにも強力な影響を及ぼしたが、一方で、オーストリアやイギリスにおいては、フランスほど強力な社会主義の思想は展開しなかった。

オーストリアのメンガーは社会主義の構築を目指す弟と保守主義者の兄との間にあり、当時のオーストリア経済学や後のオーストリア派の展開から反社会主義者と想像されやすいが、基本的には理論と政策とを慎重に分け、前者に拘っており、それ以上の思想的影響を追求することは困難である。

イギリスのジェヴォンズは、オーウェン主義、キリスト教社会主義、リカードウ派社会主義からの影響を見出すことはできない。むしろ基本的には、スミス以降の自由主義がヴィクトリア時代のイギリスにおいて花開き、ジェヴォンズ自身が自由貿易の恩恵を受けるリバプールに生まれ、かつマンチェスターで活躍したことなどの事実を踏まえると、社会主義との関係を見出すことは難しい。

しかしながら、彼らの思想や理論が後に与えた影響は、彼ら自身の思想や理論とは別である。

例えば、ワルラスの一般均衡理論は、その連立方程式の解の可能性についてバローネらが証明したことで、社会主義経済計算論争において、ランゲやテイラーらの社会主義陣営の支柱として利用された (西部 (1996) 第2章, 第3章)。ワルラス自身は、社会主義を支持していたために、その後の展開において違和感はあまりない。

一方でメンガーはハイエクやミーゼスというオーストリア学派への展開を考慮すれば、明らかに社会主義とは対立する存在に思えるが、メンガーが有した生産財価格に関する「帰属理論」

1) 本論文では「社会主義」という言葉について、語義的に正確性を求めるものではない。例えば、マルクス、レーニンの科学的社会主義といえ、資本家による生産手段の廃止、国有化などが必然的に招来すると想定されるし、空想的社会主義については土地の国有化、共有化などにおいて、暴力的なもの、漸進的なものなど多様である。同様にフェビアン協会も多様であった。本論文では、それらの多様な存在について否定はせず、一般的に利用されている表現を用いる。筆者の目的は、社会主義・資本主義といったイデオロギーへのジェヴォンズの影響について分類することではなく、ジェヴォンズの思想の知的影響を考察することにある。

を展開し、「限界効用」という用語を命名した、やはりオーストリア学派に含まれると考えられるヴィーザー（そしてシュンペーター）に至っては、『社会経済の理論』を認めている。²⁾

本論文の目的は、ジェヴォンズの後の時代への思想的影響を追求する中で、まずはフェビアン協会のメンバーへの影響について分析を行うことにある。ジェヴォンズの場合、ローザンヌ学派やオーストリア学派のような学派を形成しなかった。³⁾ しかしながら、ジェヴォンズの経済学は、ウィックスティード及びウェップ夫妻に代表されるフェビアン協会の初期メンバーたちに何らかの影響を与えるものであったと推測することができる。

I. では、ヘンリー・ジョージ、ウォーカーとシドニー・ウェップについて考察する。II. ではマルクスへのウィックスティードの批判、そしてバーナード・ショーについて考察する。III. では、ジェヴォンズの経済学がベアトリス・ウェップに与えた影響について考察する。IV. では、I. からIII. までの内容に関して、ジェヴォンズ自身がどのように考えていたのかを考察する。それらの結果をまとめ、最終的にジェヴォンズとフェビアン協会の初期メンバーたちとの関係について整理を行うこととする。

I. ヘンリー・ジョージとシドニー・ウェップ

ジャンカルロによれば、19世紀半ばのイギリス社会主義には様々なグループが存在したが、それらに影響を与えた人物として二人を挙げることができる。一人はアメリカのヘンリー・ジョージであり、もう一人はマルクスである。

本章では、これらのうちの前者について、分析を行う。

ヘンリー・ジョージ自身は社会主義者ではなく、スペンサーの社会進化論に傾倒していた。しかし彼の土地国有化と土地への単一課税論は多くのイギリス社会主義者、特にフェビアン社会主義者を魅了した。ジャンカルロは、その原因としてマルクスによるヘンリー・ジョージ評を紹介しながら、(マルクスと同様に) 空想的ではない現実的な資本主義分析がもたらす説得性を指摘する (Giancarlo (1987) p.46)。⁴⁾

- 2) 山崎 (2014) 18 頁及び Johnston (1972) pp.81-2, 124 頁を参照。大須賀 (2001) によれば、ヴィーザーの純粋に経済学的な論考『自然価値論』と社会に関する洞察を展開した『社会経済の理論』との関係について、複数の評価がなされている (222-6 頁)。
- 3) ジェヴォンズ経済学の薫陶を受けた人物として容易に思いつくのは、ウィックスティードとエッジワースである。彼らは人間行動についての法則を数学的に展開した。ロンドン学派のロビンズはこのウィックスティードの影響を受けており、ウィックスティードがジェヴォンズの影響を受けていることから、ジェヴォンズが生前にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスが創設されていた場合には、ロンドン学派と称されたかもしれない。一方のエッジワースはオックスフォードに内包される。歴史学的伝統を有し、同時に倫理的な社会問題への関心を有するオックスフォードは、ケンブリッジとも近い性質を有するものであり (西沢 (2007)), 新規で独自の学派の形成は困難であった。

さらに、次の事情を考慮することができる。このヘンリー・ジョージの『進歩と貧困』の初版が出版された1879年の4年後にウォーカーの『経済学 (Political Economy)』初版が出版された。フェビアン社会主義の立役者であるシドニー・ウェップはそれらの本の研究に基づき論文「利子率と分配法則」を書き、1888年に『クウォーターリー・ジャーナル・オブ・エコノミクス』誌に論文が掲載された。この論文は、ヘンリー・ジョージの分配法則、ウォーカーの分配法則の欠陥を補おうとするものであった。

具体的には、ヘンリー・ジョージは、生産物は生産要素が一体となって生産されるのであるのに、既存の経済理論ではそれぞれの生産要素が異なる論理によって報酬を得ていることを批判する。適用されるべき共通の論理は地代(レント)の論理ということになる。しかしヘンリー・ジョージの説明は混乱しており、地代はリカードウの地代説で決定するが、利潤と賃金は相反せずに共に変動するものと認識された。相反するのは地代と、利潤+賃金である。したがって土地が国有化され効率的に利用されることで、利潤+賃金部分は増大することになる。

一方のウォーカーは、地代、利子、企業家報酬、賃金の4つの部分から所得は構成されるものとし、地代はジョージ同様にリカードウ法則で決定するものとした。そして利子は貸付資本に対する需給で決定するものであり、企業家報酬は企業家の能力の差という「レント」の性質を有するものとして認識された。つまり地代と企業家報酬は同様の論理によって決定されるものである。対して、賃金は価格と他の三つの分配分との差額であった。

このウォーカーの考え方に対して、シドニーの考え方は、また不完全である。というのは、シドニーはウォーカーの分配法則はジョージによる分配法則の統合という面で後退しているものと把握し、労働者の賃金や利子も、地代や企業家報酬と同様にレントによって決定され、長期的には収穫逡減となると考えているように思われる一方で、資本利子は他の生産要素への分配を終えた後の残余という考え方も残しているからである。

このように問題はあるにせよ、シドニーそしてショーらのフェビアン社会主義は差額としてのレントが土地以外の生産要素にも適用可能であることを展開し、したがって労働者の賃金も、社会的な大きな枠組みからではなく、労働者の能力や意欲などの結果としての生産性に依存するという考え方を提示することができるようになったのである (Sidney (1888) p.472)。

II. マルクスとウィックスティード、バーナード・ショー

ウィックスティードはI. で取り上げたヘンリー・ジョージの分配理論から強い影響を受け

✓ 4) 山崎 (1991) 422 頁参照。またホブソンによれば、抽象的な出来事を具体的に分かりやすく説明する能力にヘンリー・ジョージは長けていたとされる。対してマーシャルは否定的な評価であった。(Giancarlo(1987) pp.46-7,n.45,49)

だが、ジェヴォンズの『経済学の理論』を読むことで、自身の経済学研究の方向性を確定させることになった (Flatau (2004) pp.75-6)。⁵⁾

ウィックステードが、マルクスの労働価値論を批判し、ジェヴォンズの効用価値論を肯定した論文「資本論」は、1884年の『To-Day』誌に掲載された。効用価値論を用いて労働価値論を否定した論理は次である。

まず、前提となるマルクスの労働価値論に関するウィックステードの理解について、筆者が補足しながら要点をまとめる。

マルクスの労働価値論とは、次である。商品消費する主体にとって意味がある「使用価値」と、商品を市場で交換する主体にとって意味のある「交換価値」である。市場を中心として考えることから「使用価値」は、「交換価値」を説明するための道具となる。市場での交換が行われない場合、財には「使用価値」のみが存在する。「使用価値」は消費する主体それぞれが有するものであり、主体の内面を比較できないことから、市場での交換が行われる場合、共通の尺度を見出すことのできない「使用価値」は意味がなくなる。

異なる「使用価値」を有する財が交換される比率は、それらの財の生産に費やされた労働量によって決定される。その場合の労働もしかしそれぞれの財において具体的・特殊なものとするれば、その労働量の尺度も見出せなくなる。そこから財の生産における具体的・特殊な労働を、肉体的エネルギーの支出というレベルまで抽象化した時、初めて労働量は比較することが可能となる。マルクスはこのように、具体的・特殊な労働を「具体的有用的労働」とし、抽象的な労働を「抽象的人間的労働」と定義し (マルクス (1989) 79 頁)、後者によって交換比率が表現されることを示した。

ウィックステードは、このマルクスの論理を把握した上で、「労働」ではなく「効用」に置き換えることでマルクス労働価値論をジェヴォンズ効用価値論に代替しようとする。

「マルクスはそれゆえ、交換可能な商品 (wares) は異なる (使用価値) というところから、同一である (交換価値) というところまで進む時に、我々は考察から効用を追い出し、ただ抽象的な労働という固まりを残すことになると主張する点で間違っている。我々が実際にしなければならないことは、異なる具体的で特殊な質的効用を考察から追い出し、同一である抽象的で一般的な量的効用を残すことである。」

(Wicksteed (1884) pp.713-4)

5) ウィックステードがジェヴォンズの『経済学の理論』を読んでいなければ、イギリスではマルクスの社会主義の影響を一層強力に受けた労働運動が展開され、その後の社会政策は異なった様相になっていたかもしれない。事実初期フェビアン社会主義者の中には、ウェッブ夫妻などの思想に対して組み入れず、例えばコールは、後にサンディカリズムの影響を受けて、協会を脱退した。

マルクスの労働価値論における問題点は次である。労働が投下されていない財の価値について、説明できないこと。次に、論理的飛躍の問題である。後者に関してウィックステードは具体的なコートの事例を挙げて説明する。マルクスが、労働を具体的労働、抽象的労働の二側面に分割し、具体的労働が「コートは寒さから身を守る」という「特殊的な効用」を生み出すと説明するのであれば、抽象的労働は論理的には「コートは何らかの抽象的な利益を人に与える」という「抽象的な効用」を生み出すと説明をしなければならない。この「抽象的な効用」についてウィックステードは説明を加えていないが、それを直接使用することで得られる効用ではないとすれば、それを保有することで得られる効用ということになり、交換可能性（または流動性）と指摘できるかもしれない。

いずれにせよ形式的・論理的に考察すれば、次のようになる。具体と抽象が労働にも適用されるのであれば、生み出される財に適用されるのも具体と抽象である。その具体が「使用価値」と関係づけられていて、「使用価値」は「特殊的な効用」に置き換えることができるのであれば、抽象は「抽象的な効用」に関連付けられることになる。しかしマルクスは抽象的な労働を、「交換価値」という効用とは異なる次元に結びつけていた（Wicksteed (1884) p.715）。

さらに、ウィックステードはジェヴォンズ『経済学の理論』第2版において展開された、因果論（労働生産・供給→最終効用度→価値）を用いて、労働価値論者からの想定される批判に回答を与える。⁶⁾

労働価値論者から想定される批判とは、効用によって価値が決定するのであれば、次の事態に対する効用理論からの説明はどのようになされるべきかというものである。工業製品の価格（価値）が、機械化の進展に伴って下落した場合、需要する者にとっての効用の変化があるわけではないのに価値の下落が生じており、投下労働価値論の方が説明力を有しているというものである。

これに対してウィックステードは、上に挙げた因果論に「無差別の法則」「最終効用度の遞減」というジェヴォンズが提示した道具を用いて次のように説明する。

機械化の進展に伴う供給増大は、既存の製品を有している消費者の最終効用度を下落させる。無差別法則に基づき、製品価格は下落する。（Wicksteed (1884) pp.715-6）

ジャンカルロによれば、ジェヴォンズの理論に基づく、ウィックステードの一連の展開に対して、当時のマルクス主義者のヒンドマン（Hyndman）が反応をしたものの力は持ち得ず、また当時イギリスに滞在したエンゲルスも何ら反応しないままで、イギリスにおけるマルクス主義は持ちこたえることができなかった（Giancarlo (1987) p.43）。そしてこの展開はフェビアン社会主義の立役者の一人であったジョージ・バーナード・ショーをジェヴォンズ主義者にした。

6) Jevons (1888) p.165, 123 頁。阿部 (1988) 参照

「その結果は、ウィックステード氏の説明に魅了され、確固たるジェヴォンズ主義者になった。私はジェヴォンズの理論の精緻さ、マルクスを含めた以前の経済学者が使用価値、交換価値、労働価値、供給需要価値、当時の他にも沢山ある価値の中の混乱に迷い込んでいたようなすべての事例において、ジェヴォンズの理論が示した美しさに魅了されたのである。」

(Pease (1925) p.261)

Ⅲ. ビアトリス・ウェップにおけるジェヴォンズの影響

Ⅲ. では、特にビアトリス・ウェップの協同組合論におけるジェヴォンズの影響を分析する。ビアトリスは『私の修業時代 (My Apprenticeship)』において、消費協同組合を評価する上で、ジェヴォンズの名を挙げて次のように書いている。

「究極的に重要だったのは、イギリス人にはよくあるのだが、ぼーっとした状態だったのに、突然、専門的な経済学者がその性質あるいは重要性を理解する前に、交換価値の非常に重要な要素に気付いたことである。事実、ジェヴォンズが次の事を発見する前に、彼らはジェヴォンジアン達であった。〈交換価値の支配的なそして範囲を規定する要素を設定するのは、「効用」あるいは特別な需要〉だということである。」

(Beatrice (1926) p.329)

引用にある「彼ら」とはロッチデール・パイオニアであり、「専門的な経済学者」とはジェヴォンズを代表とする経済学者である。引用したビアトリスの言葉はしたがって次のように表現し直すことができる。

ジェヴォンズの効用価値説以前に、すでに価値（交換価値）は労働によってではなく、効用によって決定されるという発想をロッチデール・パイオニアが発見していた。

ロッチデール組合が登場するのは1844年のことであり、「産業および節約組合法」が成立したのが1852年である（中川（2003）22-4頁）。一方、ジェヴォンズが『経済学的一般の数学理論』を出版したのが1862年であることから、ビアトリスの指摘はとても興味深い。そこでビアトリスの指摘の意図をさらに掘り下げてみる。

ビアトリスは、「社会主義の進化⁷⁾の次の段階」というタイトルで、3つのポイントを解説

7) ビアトリスは幼少からスペンサーの教育的指導を享受した。金子（1997）によれば、しかしスペンサーの個人主義的要素よりも社会有機体に関する特徴を保ち続けた（44頁）。さらに江里口（2008）によれば、スペンサー・マーシャルらの自由主義とは一線を画し、進化論者としてはハクスリーの影響を受けていた（51-2頁）。

している。

1) 立法化と組合の圧力

ビアトリスは、慈善組織協会（COS: Charity Organisation Society）に属し、スラム街であったソーホー地区の環境改善やイースト・エンドの貧困調査などを行った。この調査はロンドンの複数の港湾地域（docks）労働者の調査であった。様々な労働者が港湾地域には存在し、その中には生きながらえるのがやつの状態で買いたたかかれている労働者も存在した。またこの調査は貧困などの原因にも立ち入ったものであった。港湾地域の造船技術の変化、企業の競争、それに伴う労働節約的な産業化によって臨時雇いの労働者が増加し、さらに一度臨時雇いの労働者になってしまった場合には、労働者の性質が変化することでその状態から抜け出せなくなるなどの事態が存在した。⁸⁾

「イースト・エンドの研究で次のことが分かった。19世紀の商業と産業のまさに中心の群衆の中で、過度にレントを蓄積する地主や利潤を生み出す資本家が存在し、彼らの通った跡には肉体的な憐れみと道徳的な退廃が残る。」

(Beatrice (1926) p.277)

そしてこの事態へのビアトリスの対策は、「適切な立法化と労働組合の圧力」であった。⁹⁾

2) ナショナル・ミニマム

1) の問題への対策（政府による規制と労働組合による介入）を講じたとしても次の課題が残るとビアトリスは指摘する。その課題とは、景気の変動である。この景気の変動は生産手段を有する少数企業による不確実な（speculative）経済活動の結果生じるものである。さらにすでに存在している公教育、公衆衛生などや非自発的の失業者への生活保障が存在しない場合に、私的所有の体制は革命に対抗できない。¹⁰⁾

これらの問題に対応するために「ナショナル・ミニマム」が存在しており、これをビアトリスは社会主義へと進む第二段階に据える。

8) Beatrice (1887) の概要が、次に掲載されている。Mckelvey (1953) pp.1-5

9) 1887年の段階での回答は次である。「自治体社会主義（municipal socialism）」であり、公益信託を立ち上げ、企業が共同して運営するというものであった。(Beatrice (1926) p.498)

ビアトリス自身、このような介入について、ヴィクトリア朝の個人主義からの乖離であると認識しており、この点でマーシャル等の正統派経済学との乖離をも意味するものであった。

10) ビアトリスがこの文脈で使用する表現の中に、公的存在がない場合に国家は即座に「race deterioration」を回避できないとある。矢野（2014）では社会政策と優生思想との関係において、フェビアン協会と優生思想についてもまとめている。

しかし、1)と比較して社会主義への段階論としての説明は多くない。藤井(1995)によれば、ナショナル・ミニマム概念については、『産業民主制論』(1897)で使用される以前に、シドニー・ウェッブによって、『イギリスの社会主義』(1890)において、モラル・ミニマムという用語が利用され、その概念(公正賃金)が展開したものであるとされる(89頁)。

江里口(2008)によれば、ナショナル・ミニマム論は「マーシャルに対するウェッブの渾身の反撃」(72頁)とされた。論理は本論文のI.と関係する。

ヘンリー・ジョージ、そしてウォーカーの研究を踏まえて、シドニーは自らのレント論を展開したことはすでに見た。そしてシドニーは新しい経済学を構築したいと考えていたのだが、マーシャルの『経済学原理』に先を越されてしまい、かつマーシャルの著作にはシドニー自身も構想していたレントに関する考え方が「準地代」という概念で展開されていたのである(江里口(2008)35頁)。

そしてシドニーは、上のミニマム論に通じる法定8時間労働日を巡ってマーシャルと議論を戦わせた(江里口(2008)72頁)。マーシャルは後のピグーへと至る新自由主義にあり、古典派の自由主義を保持しようとしたのに対して、イースト・エンドに向き、「退廃」からの脱出の困難な労働者を調査してきたビアトリスというパートナーを得たシドニーのアート(政策)論は、当時の最大のストライキなど斜陽化してきたイギリス経済の事情も相俟って力を有するものであっただろう。

そしてビアトリスは、もちろん『産業民主制論』をシドニーと共に認めてはいるが、ナショナル・ミニマム概念定式化におけるプライオリティーは、シドニーが有すると認めていただろうし、ビアトリスの興味関心は3)に示す協同組合、労働組合などの協同社会の構築に重点があったと考えるべきであろう。

3) 協同組合運動

Ⅲ. の冒頭で指摘した部分と関連するのが、「消費」に重きをおく組織である。したがって少し長いですが、引用しよう。

「現代の企業に取って代わり得るだろう、そして同時に生活手段の保障を強化し、全体の人々の間に自己発展の機会を等しく提供すると考えるものは、…イギリスの労働階級が発展させた消費協同組合の構成と活動の中にある。」

(Beatrice (1926) p.379)

当時の企業が有している問題は、1), 2)でも指摘したが、社会的な貧困を増大させ、貧困者が浮上できない状況を生み出していることにある。対策として、法規制の強化、ナショナル・ミニマムなどの保障が指摘された。そして協同組合の利点として認識されていたものは、節約

的な家計、質素儉約による貯蓄などであったが、ビアトリスが可能性を見出すのは、消費者としての共通の便益を求める消費者の共同体がもたらす産業の支配である。この産業の支配のためには必然消費のみではなく、生産・流通などが含まれることになる。

ビアトリスは流通を含めていないが、上の次の論理として消費協同組合の民主主義に、手工業労働者や頭脳労働者の民主主義的な組織を合体させようとする。この発想はビアトリスが1889年にビアトリスが労働組合運動に関する研究を自らの目標と定めたときから考えられ続けたものであった。

さらに、ビアトリスは消費協同組合と職業協同組合の合体だけではなく、自治体や政府も、人々の消費するサービスを提供するのであれば、何ら他の職業と異なることはなく、結合する方向を模索する。¹¹⁾ 具体的には、ガス・水道・学校・病院なども当然消費者の視点から求めるサービスに基づき提供されるべき方法が決定される論理は協同組合論理として展開できるものであるばかりではなく、「新たな必要を満たし、新たなサービスを提供する目的」(Beatrice (1926) p.380) を有する存在となり得るのだった。

ビアトリスの構想したのはしたがって、消費・生産・公共を包括する「共同コモンウェルス」だった。¹²⁾

IV. ジェヴォンズ自身の考え方

まず、上に分析してきたそれぞれの内容においてより明確にジェヴォンズ自身の理論との関係を説明することで、フェビアン社会主義に与えたであろうジェヴォンズの含意について説明しよう。

具体的には、I. との関係では分配論を、II. との関係では価値論を、III. との関係では組合論を説明する。それらの後にジェヴォンズの与えた影響について整理することとする。

1) 分配論

生産要素報酬における限界生産力説の全面的なまたは統一的な展開を果たしたのは、II. で扱ったウィックステードである。ジェヴォンズは限界生産力説による分配法則を展開できて

11) この背景には「Municipal socialism (自治体社会主義)」という政府が主導となって社会改革を展開していく運動の興隆が存在した。Sidney (1889) 第7章「議会制・自治体社会主義」参照。

12) 『産業民主制論』もそうだが、ビアトリスの全体論的な管理と個人の自発的なバランスとは非常に難しいことが容易に想像される。ロッチデール協同組合の利益としてビアトリスが指摘している (Beatrice (1926) p.369)、性別階級など考慮されることなく自由に加入できることは、裏返せば、脱退の自由も確保されることになる。そして消費協同組合の特徴はその点に求められるだろう。しかし生産協同組合、自治体などが加わるときに強制的な加入にされてしまうという矛盾を有するものであり、ビアトリスを含むウェップ夫妻の不安定さはその後のフェビアン協会の展開を予想させるものだったかもしれない。

いない。『経済学の理論』第2版（1879年）において、地代における土地の独占的な報酬について説明した際に、他の生産要素にも同様の説明方法を適用できるという論理を示唆はしているが、それ以上のものではない。さらにそこには政策（例えば土地単一課税など）も存在しない。

I. で取り上げた、ウォーカーやヘンリー・ジョージも生産要素価格が同時的に決定されるモデルではなく、その点においてジェヴォンズの分配論から大きく発展しているということではない。注意すべき点は、シドニーがウォーカーから受け継ぎ、自身もさらに展開した、レントである。このレントは、土地・資本・労働（企業家や労働者）の能力が独占されることで発生する。この独占を緩和させるべく対策が必要であるとされたことである。

2) 価値論

ジェヴォンズはマルクスを批判してはおらず、また投下労働価値説も批判はしていない。価値決定には必然生産に利用された労働もふくまれることにはなるが、一度支出された労働は（価格には直接影響を与えず）、財の数量において影響を与え、その財から獲得する需要者の最終効用度が増加し、交換比率に影響を与えるという論理である。ジェヴォンズのこの考え方は、第2版（1879）において展開されたものであったが¹³⁾、ウィックステッドはこの考え方を踏襲していると言える。

ジャンカルロは少し誇張しているかもしれないが、次のように論じる。

「社会主義活動の展開にとって重要な連結点において、〈科学的〉社会主義の代表であるマルクス主義者の主張に対して重大な衝撃を意味する。」

(Giancarlo (1987) p.55)

3) 組合論

ジェヴォンズは、改革派が運営する社会科学振興協会が1871年に「産業パートナーシップ」というタイトルの講演を行った。

当時も資本家と労働者との間のトラブルが様々な社会的問題を生み出していることに対し、幾つかの事例から、協同組合を主張した。この協同組合は生産者同士で構築されたものであり、ジェヴォンズ自身それ以上の展開をしていないが、産業上の協同組合である。

しかし次の表現が特徴的である。

「問題について考えるようになると、容易いのは産業上のパートナーシップが人間本性

13) 阿部（2016a）では、第二版で挿入された意味について、ミルの論理学への批判の可能性を提起する。

「利己心」の最も確実な原理に基づいているということである。…4つの動機があり得る。(1) 解雇の恐れ, (2) 高給あるいは雇用条件の改善, (3) 雇用者への良心と専心の欲求, (4) 職務上での直接的な利益」

(Jevons (1870) p.139)

ジェヴォンズは、『経済学の原理』初版が出版される以前に、すでに上のような労働問題と格闘しており、産業上のパートナー形成において重要なのは利己心とも把握している。

この「利己心」が最大限発揮される組織は、消費協同組合である。ではこの消費協同組合をジェヴォンズはどう見ているのか。

1878年に初学者向けにジェヴォンズが書いた教科書『経済学』では、協同組合、アソシエーションなどについて、その小さな教科書の割に多く扱われている。そしてその中でピアトリスも言及したロッチデール組合についての言及がある。

「約35年前にロッチデールの労働者たちが次のことに気づいた。小売店で店員が上げた利益を、卸売品と一緒に購入したり、彼らが立ち上げた協会の構成員の間でそれを分ける方法で、一緒に働くことで分けられる。…彼らはこれを協同組合 (co-operative society) と呼んだ。…しかしそのような協同組合には資本と労働といったものが関係することがほとんどまったくなかった。…真の共同体は共に働くすべての人に利益をもたらすものである。」

(Jevons (1878) pp.79-80, 傍点は原文太字)

ジェヴォンズは、当時の社会問題に基づき大衆の啓蒙を行う必要を感じていた。この教科書も上の引用にある講演もその目的のために認められたものであった。そしてこの問題関心とともに上のジェヴォンズの指摘は時代的懸隔を経てそのままピアトリスに受け継がれていると指摘できよう。そして引用の途中にあるように、消費協同組合の有する問題点を回避する目的も含め、ピアトリスは生産協同組合を消費協同組合に包摂しようとしたのである。しかしながら、ジェヴォンズとの相違を指摘しておく必要がある。ジェヴォンズの協同組合論はあくまで生産・産業協同組合が主であったのに対して、ピアトリスは消費協同組合が主であったことである。そしてその消費協同組合の理論としてジェヴォンズが提示した効用価値論が貢献していたのである。

おわりに

本論文では、ジェヴォンズの経済学、経済思想がその後展開した可能性のある人への影響を

考察した。その際に可能性のある人はフェビアン協会と関係のある人という一つの共通項にまとめた。

その共通項は闇雲に出てきたわけではない。本論文では紹介できなかったが、Ⅰ. で考察したシドニー、Ⅱ. で考察したウィックスティード、そしてショウ、Ⅲ. で考察したビアトリスは、もちろんフェビアン協会という共通項で括ることができるのであって、彼らは後にロンドン・スクール・エコノミクス設立に関係するのである。ウェブ夫妻、ショウはその設立に奔走したし、ウィックスティードの主著 *Common Sense* のまえがきを書き、かつウィックスティードに対して崇拜の念を抱いていたのが、ライオネル・ロビンズである。

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスはその創設において、フェビアン協会の趣旨に利用するという目的でフェビアニストの遺産が利用された。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスはそして、フェビアン社会主義の政策実現のための教育を施すというよりは、まったく価値自由の状態の研究が遂行される場所であった。その原因は、フェビアン協会が当時のマルクス主義やサンディカリズムなどと対峙していたことに求められる。暴力によるものではなく、時間を掛けてでもしっかりと貧民政策などを展開する必要があり、その政策の展開には統計学・会計学などの専門的な知識とスキルとを、学修するものの価値観とは一線を画する状況で使いこなすことのできる人材が必要であった（阿部（2016b））。

しかしその副産物として、フェビアン協会の思想も大学の学修の場に置いては、排除対象に含まれる可能性を有したのであった。

ジェヴォンズが大衆に対して啓発を行うために教科書等を書いたり、講演する活動はフェビアン協会による大学教育の理念にも一致する。しかし次の点はジェヴォンズには見えておらず、フェビアン達に見えていた。

一つは進化論の展開である。ジェヴォンズはちょうどスペンサーが活躍し出したころであるのに対して、ウェブ夫妻の時代にはスペンサー批判も展開している時期であった。このスペンサーとの関係は自由主義をどのように考えるかという深いところで根本的な違いを生み出すものであった。

また消費協同組合と生産協同組合、さらには地方政府までも統合させてしまい、それぞれの利益を引き出そうとするビアトリスの「共同コモンウェルス」の考え方に、ジェヴォンズは当然ながらついては行けない。

しかし一方でジェヴォンズの啓蒙書、講演活動、経済活動の説明原理としての功利主義なくして、ビアトリス、ウィックスティードの理念を裏打ちする論理は展開しなかった可能性がある。その点で、ジェヴォンズの思想はその後のフェビアン、さらにはロビンズにまで受け継がれていっているという可能性を指摘できる。

最後に、本論文は、石橋貞男先生に対する追悼論文でもある。先生が生存されていたならば、

本論文で触れた、当時のウィックステードらによるマルクス経済学批判についてお聞きしたいことが多く存在した。悔しい気持ちも残るが、いずれお話を伺うことができる時まで記憶にとどめておくことにする。先生のご冥福を心からお祈りする。

参考文献

- Beatrice, P. (1887) *The Dock Life of East London, Nineteenth Century*, Vol. 22, Henry S. King, pp. 483-499.
- Beatrice, W. (1926) *My Apprenticeship*, Longmans, Green and Co.
- Flatau, P. (2004) Jevons's One Great Disciple: Wicksteed and the Jevonian Revolution in the Second Generation, *History of Economics Review*, Vol.40, History of Economic Thought Society of Australia
- Giancarlo de Vivo (1987) Marx, Jevons, and Early Fabian Society, *Political economy : studies in the surplus approach*, No.3, Rosenberg & Sellier
- Jevons, W.S. (1870) On Industrial Partnerships, *Methods of Social Reform*, Augustus M, Kerry, 1883
- Jevons, W.S. (1878) *Political Economy*, Macmillan and Co.Limitd, 1919
- Jevons, W.S. (1888) *The Theory of Political Economy*, 3rd ed. Macmillan and Co. (寺尾琢磨改訳『経済学の理論』日本経済評論社, 1984年)
- Johnston, W.M. (1972) *The Austrian Mind An Intellectual and Social History 1848-1918*, The Regents of the University of California University of California Press (井上修一・岩切正介・林部圭一訳『ウィーン精神』みすず書房, 1986年)
- Jolink, A. (1996) *The Evolutionist Economics of Léon Walras*, London and New York, Routledge
- Mckelvey, J.T. (1953) *Dock Labor Disputes in Great Britain*, New York State School of Industrial and Labor Relations Cornell University (Online Archive California のウェブページからダウンロード, アクセス日 2016年1月23日)
- Pease, E.R. (1925) *The history of the Fabian Society*, 2nd ed. / with a supplementary chapter, London : Fabian Society
- Sidney, W. (1888) The Rate of Interest, *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 2, No. 4 (Jul., 1888) , pp. 469-472, Oxford University Press
- Sidney, W. (1889) *Socialism in England*, Longman
- Wichsteed, P.H. (1884) Das Kapital : A Criticism, To-Day, Vol. II . (New Series) , pp.388-409, Reprinted in L. Robbins, ed. *The Common Sense of Political Economy and Selected Papers and Reviews on Economic Theory*, Routledge, pp.704-23, 1967
- 阿部 秀二郎 (1998) 「ジェヴォンズの生産理論」『研究年報 経済学』第60巻第1号, 東北大学経済学会
- 阿部 秀二郎 (2016a) 「ジェヴォンズによるミル論理学批判と経済学」『経済学の座標軸』仙台経済学研究会編, 社会評論社
- 阿部 秀二郎 (2016b) 「LSE とロビンズ—二つの視点—」『年報』第2号, 和歌山大学「教養の森」センター
- 江里口 拓 (2008) 『福祉国家の効率と制御』昭和堂
- 大須賀 直樹 (2001) 「ヴィーザーと「法の錯誤」」『立教経済学研究』第54巻第4号, 立教大学
- 金子 光一 (1997) 『ピアトリス・ウェブの福祉思想』ドメス出版
- 中川 雄一郎 (2003) 「〈労働者協同組合物語 (11)〉「産業および節約組合法」の成立と産業パートナーシップ」『協同の発見』第135号, 共同総合研究所
- 西沢 保 (2007) 『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店
- 西部 忠 (1996) 『市場像の系譜学—「経済計算論争」をめぐるヴィジョン』東洋経済新報社

- 藤井 透 (1995) 「コンベンショナル・ミニマム, モラル・ミニマム, ナショナル・ミニマム—『産業民主制論』の形成—」『佛教大学総合研究所紀要』第2号
- マルクス (1989) 『資本論 1』資本論翻訳委員会訳, 新日本出版社
- 御崎 加代子 (1998) 『ワルラスの経済思想 一般均衡理論の社会ヴィジョン』名古屋大学出版会
- 矢野 聡 (2014) 「優生学と社会政策」『政経研究』第51巻第3号, 日本大学法学会
- 山崎 弘之 (2014) 「メンガー経済学の世界 (2)」『国士館大学政経論叢』通号第167号 (平成26年第1号), 国士館大学政経学会
- 山崎 義三郎 (1991) 「訳者解説」(ヘンリー・ジョージ著『進歩と貧困』), 日本経済評論社

Jevons for the Members of the Fabian Society

Shujiro ABE

Abstract

This paper considers W. S. Jevons's influence on the members of the Fabian Society, especially Sidney Webb, Beatrice Webb and George B. Shaw. He had least influence on the distribution theory of Sidney Webb, which depended on two economists -H. George and F. A. Walker. George B. Shaw was influenced by Jevons's Utility Value Theory via Wicksteed. Finally Beatrice's theory of Co-operative system theory was most influenced by Jevons's Utility Value.